

昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成十九年四月一日発行
通巻九九二号（毎月一四一日発行）

京鹿子



4月号

枝の雪

丸山佳子

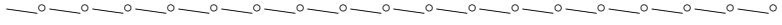
春は遠し急くな急くなと踏切棒

白息で南無観音のつづら坂

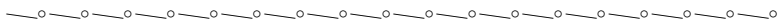
トンネルを八つぬけ雪を汚さずに

ああ雪嶺女人禁制今はなし





札納め鞆の中は私物のみ
寒が明けお手植松の幹を撫づ
まだここに冬將軍のお箱かも
今といふ刻は今しか枝の雪
鴨百がとんび一羽に気負けとは
生きすぎし感じまだなし花八つ手

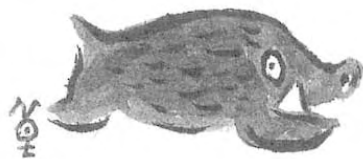


豊田都峰

清響集 その七十二



氷爆のとぢこめてゐる山の音
雪のきて丘の木立のこむらさき
雪もやのまたからまつを生みにけり
一本のしらかばゆゑの雪の暮
冬茜野末に一樹置かれゐる
烟出に家紋を透かし春隣



風花を追へば比叡の空あたり
雪嶺の昨夜の夢よりとほかりき
遠嶺もまたみづいろにいぬふぐり
遠ければ春嶺として暮れしづむ
たたかれて出づれば野らの春隣
いち早く春の灯となる水ほとり
末黒野の起伏は海に呼ばれるる

『平成秀句選集』(「俳句」別冊)に十句寄稿

秀華採集

銀河降るけもの心地の隠れ里

鳥羽 夕摩

隠れ里を尋ね、落人の心になっての作品。「けもの」の持つ本能的な脅えが、鮮やかな「銀河」と相俟って効果的である。

枯木立かくなるうへは星咲かす

村田 富美子

冬の蝶払へばすでに風のもの

城石 美津子

前句。ひとつの究極の心理状態と考えてよい。それにしても「星咲かす」は救いである。後句、空を払らったような感覚がうまく表現されている。具体的なものをさがして、自分の中にあるものを詠ってほしい。

鈴鹿 仁

春よ春

寒戻る神馬木となり埒もなし
春よ春神狐の唧ふ鍵の沙汰
かげろひし師団街道兵とぬし
母の味ははの彩して木の芽和
うすらひや一書よすがの風となる
うすらひのB面もいま詩ん中
地虫出づ知らず貌して招き猫

近 詠

宇都宮滴水

風

さくら貝未完の文は波に捨つ
一円玉かぞへ二ヶ月の灯をふやす
まつさらな雲呼びよせる早春譜
探梅や通りすがりの風に問ふ
初ひばり宙の一角うろたへる
耕しの背ナ蹴りあげる嬰やの足
消炭や過去に未練の炎いろあと

神麓集



文楽は大夫三味線をしどりで
林 日圓
沢市とお里夫婦や笹子鳴く
熟達の演技は国宝翁草
つぼすみれ壺坂観音靈驗記
初春の当麻まんだら中將姫

加齢かな息もつがせず師走来る
北村 香朗
嵩を掃く桜落葉に蔦落葉
冬の雨女子マラソンに容赦なく
年賀欠札それぞれに影重々し
バリ島に孫の擧式の亥年明く

雪借景 丸山 冬鳳
初春や窓の日射しを愛しめり
眩しさの冬日雲なし頬撫でる
禽しきり洋傘ひらけば雪時雨
雪の来て杉の山々肩を張り
句にひとりコーヒーは濃く雪借景

風寒し嘘ばかりつき去る病室
吉田 多美
新年や白髪多きに鏡置く
風舞へど波頭統ぶ寒の月
猪鍋の誘ひ断はる北暗らし
夫見舞ふ葉牡丹の渦まだ固し

人恋し 藤岡 紫水
寒垢離の燭立ちのぼる滝襖
人とゐて人なほ恋し寒椿
寒椿一花に思ひ尽しけり
厄落す人の影より人の出て
きつかけは傘の触れ合ひ春しぐれ

白狐 丸井 巴水
山姥の呼び来る夜や虎落笛
大注連の結界に棲む白狐の目
おろかなる戦破魔矢に鏃なし
札納め稲荷土産の饅頭喰ひ
桃すこし近づく里の婆ひとり

神麓集



丹生をだまき
柚子湯出てもも色の爪切り揃ふ
冬の鴉雄叫びぬしが不意に発つ
自由と孤独背中合はせに寒に入る
吹雪く空白き日輪天心に
牡丹鍋ふうふういづれも健啖家

嵐山花灯路

山田をがたま

候異変紅葉健在嵐山
粹凝らす露地行灯に冷え忘る
照らされて紅葉に戻る小倉山
時雨はれ妖精とび交ふ夜の竹林
花灯路竹あかりに細き冬空

荻野 千枝

晩秋の比叡七彩を傾ける
晩秋の愛宕真紅に染まり昏る
大人比女の父母眠り居る草もみぢ
詩ごころ消えて夜霧の鎮むころ
気づかひの見ゆ歳末の郵便局

雪の会津 柴田 朱美
ふりむけば雪の磐梯おほらかに
遠雪嶺智恵子の空の笑みこぼれ
雪眩し風が奏ずる自刃の丘
山墓のまへもうしろも雪深し
雪深き会津の酒を飲み比べ

高橋 千美

笹鳴や寺と社へ磴別れ
本堂へ入口ひとつ藪柑子
ひとつだに無駄のなき石冬紅葉
雪がきて埋もるお市のものがたり
糴びとの指がもの言ふ十二月

高木 智

大島を脱いで初湯にしみじみと
姫始肩の力を抜きもして
初電話術後の経過よしといふ
枯芝やいのちの森に人の声
枯芝に人現れて緑生む



京鹿子集

豊田都峰選

銀河降るけもの心地の隠れ里

わびすけや人生後半よろしくて

竜の玉目鼻書かないお人形

存問や胃の真中に虎落笛

こんな日は小芋に浸みる母の味

山眠る百羽からすが鳴かうとも

印鑑を真すぐに押して事務始

寄せ植糸の葉牡丹影をかばひあふ

枯木立かくなるうへは星咲かす

手鏡は母とおそろひ年迎ふ

京都 鳥羽 夕摩

村田富美子

冬の蝶払へばすでに風のもの

呼んでゐる冬桜あり病みてをり

冬の木に溺れてをりしかくれんぼ

草も樹も消して大学聖樹の灯

現世のあしたへ風の冬芒

極寒の決意ニイタカヤマノボレ

今年酒十二月八日を忘れぬる

好日や孫に引かせし太太根

恙なきこと只管に去年今年

遠目にも二峰睦める初筑波

横浜 城石美津子

千葉 河内 桜人